



研究エッセイ

ESSAY

紙の造形 いざなぎ流の御幣ごへい

梅野 光興（高知県立歴史民俗資料館・主任学芸員）

太夫たゆうと呼ばれる民間宗教者が、和紙を折ったものを、断ち板（まな板の小さいようなもの）の上に置いて、小刀をあてる。小刀はスースーッと和紙の上を動いていくつかの切れ目が入る。この切れ目の入れ方が、その御幣の形を決定する重要なポイントである。切った紙を手にとって、竹の幣串にはさみこむ。傍目には同じように切っているようにしか見えないのに、幣串にはさまれた御幣はそのつど違う形になって生まれ出る。

高知県物部村ものべそんに伝わる民間信仰「いざなぎ流」には、数多くの御幣の切り方が伝えられている。いざなぎ流は陰陽師の末裔である、と考えられていることから、最近の陰陽道ブームの中で注目を集めているが、さまざまな形の御幣の美しさにも関心がもたれている。

昨年しんねんの秋、高知県立美術館ホールで、国際的な舞踊芸術家のピナ・バウシュさんとその一行40人ほどが、このいざなぎ流の御幣切りを見学した。一枚の白い紙が、さまざまな形に変幻する。そして、その形ひとつひとつに精神的な意味がある。驚きと感心の声があがり、皆いつまでもその場を離れなかった。まるで手品を見た子どものように。

御幣とは何か。

辞書を引くと本来は神に奉るものの意味であり、麻、木綿、絹、糸などのほか、衣服、武器、農産物、水産物など、神へのありとあらゆる供え物の総称であった。その時、布を串に挟んで奉ったものが、四角形の紙を挟むように変化し、さらに両脇に紙垂しでを垂らすようになった。そしてその機能も供え物から、それ自体へ神が宿るものへと変わっていった。それが神前に飾られていたり、神殿の奥で御神体に準じた形で祀られる御幣になったのである。

いざなぎ流の御幣は、その変化がさらに進んだ段階のもので、祀りたいカミの種類や使い方によって、御幣の形を切り分ける。天神、山の神、水神、大荒神、木霊荒神しんぼく こぼく すそ しそく どうろくじん、新木、小木、呪詛、六道、四足、道六神、だいばの

人形、不動五大そう、八幡、オンザキ、式王子、高田の王子、五体の王子、大鷹、小鷹、摩利支天、庚申こんじん、金神...。御幣はそこに宿す神霊たちの名前前で区別され、その種類は130種におよぶとも言われている。物部村のムラや家で祀られるさまざまな神霊たちが御幣の形で形象化されているのだ。

一目で何の神かわかる幣は決して多くない。垂れ下がった「下がり」の数、細い切れ目につけられるチヂという折り目の数、そして頭の格好などの抽象的な形によって御幣は微妙に区別されている。切り方は太夫の伝によっても異なるため、ある太夫にこれは何の幣か質問しても、切った本人でなければそれが何の神なのか即座に答えるのは難しい。いざなぎ流にいったいどれだけの御幣の切り方が伝えられているのか、実のところよくわからないのである。

しかし、いざなぎ流の幣を見ていると、何となく、いざなぎ流らしさを感じる。

その特徴のひとつは御幣に「顔」があることであろう。小刀の先端で目や口に相当する小さな穴を開ける。三角形の小穴が三つ開くだけで、御幣は「顔」を獲得して人格？を持つ。その顔は、私たち部外者に可愛らしく笑いかけているようにもみえる。

ところが、この顔のある御幣がくせ者である。金神、山みさき、川みさき、大天ぐう、きじん、ヤギリヤギョウジン...。私たちの目をひく「可愛い」御幣たちは、いずれも凶暴なパワーを内在した、山や川に潜む精霊たちのものが多い。金神は、人間に災いをもたらす大悪神。山みさきと川みさきは、二つの谷や山が三方から来ている所に集まる邪悪な霊たち。大天ぐうは天狗。きじんは鬼神...。顔のある御幣たちは人間を守護する神々というより、下手すると凶悪な力を発揮する山や川の精霊・妖怪たちを表現した幣が多いのである。

顔の多さはその御幣の禍々しさの反映ですらある。山ミサキ・川ミサキの幣はひとつの幣に3つの顔をもつし、何と9の顔を刻むものすらある。9の顔をもつ異形の幣は

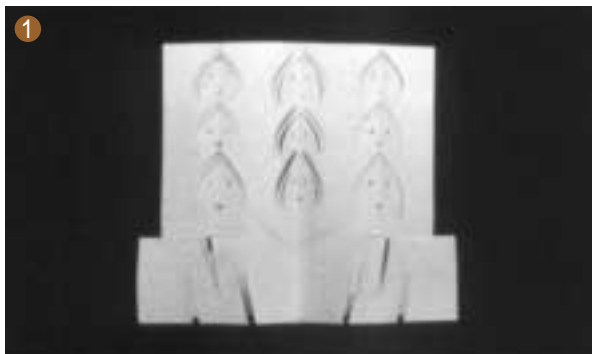
キジンの幣、またの名は六ツラ王八ツラ王九ツラ王の幣である(写真1)。物部村の伝説で頭が八つあるヘビ・ヤツラオウをかたどったものである。日本神話の八岐大蛇を想起させるヤツラオウは、山の妖怪たちのなかでも、ことさら強大なものとして恐れられている。

そのような意味で、祭りの舞台の四方に張る注連縄にとりつけるヒナゴ幣は興味深い(写真2)。ヒナゴ幣も3つの顔を一枚の幣に刻むものだが、神楽の舞台の中を守護する、いわばボディガードのような存在である。神楽を妨害しようとするあらゆる邪霊や呪いからこのヒナゴが守ってくれる。人間に味方する者にも顔のある幣があるのだ、と考えてしまう。しかし、ヒナゴは汚れた人間が舞台に近づいてもはじき飛ばしてしまうパワーを秘めている。ヒナゴとは人間の味方なのではなく、たやすく人間にコントロールできない力、その見えない力を、いざなぎ流の太夫が、御幣というかりそめの形に封じ込めて神楽の舞台の衛兵としてあやつっているにすぎないのだ。目に見えないパワーや神霊を、御幣という操作しやすい形に変換するところに、いざなぎ流祈祷の醍醐味があると言えようか。

チヂという折り目も、いざなぎ流の御幣を神職の御幣と区別する特徴になっている。多くのチヂをもった幣は、御幣に言いしれない美しさを作り出している(写真3)。

しかしチヂはただの装飾ではない。チヂの数は、その神霊によって、四つ、五つ、七つ、十二...、と決まりがあり、この数が違ってしまうと別の御幣になってしまうくらい大事な部分なのである。また「くぢ(または「ちぢ」ともいう)は、他の太夫に祭りを妨害されたときにそれを跳ね除ける力をもつので、くぢの折り方がうまくできているかどうかで幣が生き死にするという」(斉藤英喜「伊奘諾流の太夫から学んだこと」『日本文学』1991年6月号)伝えもある。この折り目が呪術的な力の源泉ですらあるのだ。

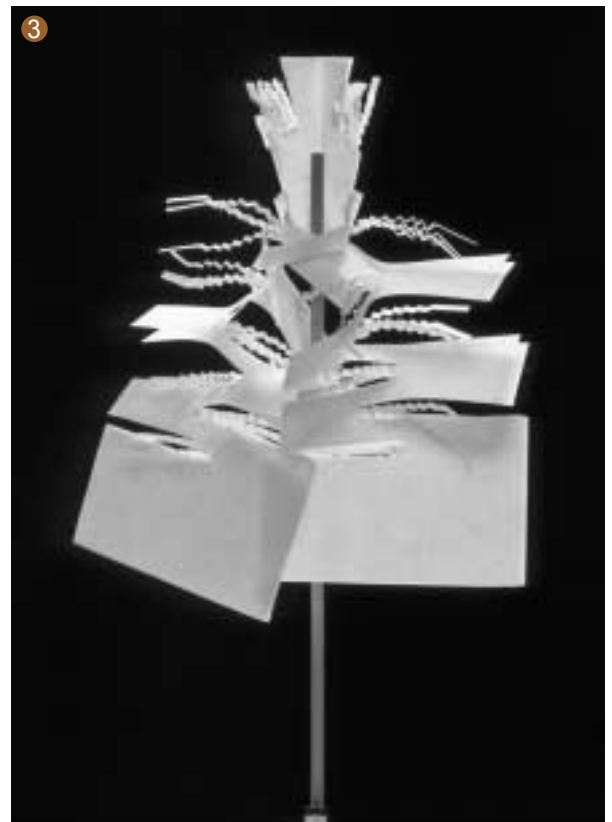
多様に展開する御幣の「かたち」の世界。かたちは戯れのように変化し増殖していく。このかたちを研究するためには、頭の形や下がりやチヂの数に託された意味の世界を知らねばならない。そのうえで、意味と形の間に何か法則や傾向のようなものがあるのかを少しずつひもといていくことが必要だろう。



1 きじんの幣(高知県物部村別府・中山義弘太夫作)



2 ヒナゴの幣(高知県物部村別府) 四方に一つずつ飾られ、東西南北を守護する。12の顔が並ぶので、「十二のヒナゴ」と呼ばれる。



3 志岐王子の幣(高知県物部村桑ノ川・小松為繁太夫作) 病人祈祷などで呪力を発揮する志岐(式)王子の幣